
未来のさらに向こう

TAKERU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来のさらに向こう

【Nコード】

N3011P

【作者名】

TAKERU

【あらすじ】

高校生園崎猛は平穏な日々を送っていた…
だがその平穏は長くは続かなかった…
荒廃した未来の中で少年たちはどう戦うのか…

* 登場人物紹介 *

* 人物紹介 *

・園崎そのさき 猛たける

主人公。

長髪

身長172センチ

細身

正確は真面目ではないが、そこまでやんちゃでもない。スポーツが得意。陸上で県大会に出たこともある。勉強は得意ではない。

・陣野じんの 練れん

猛の幼馴染。

身長170センチ。

勉強がとてもしできる。

学年2位

スポーツはあまりできない。

・敦賀つるが 昇嘉まいか

練と同じクラス。

身長164センチ。

髪は肩まである。茶髪。

学力は中の上。

バドミントンをやっている。

・染口 勇そめぐち ゆう

猛達より一つ年上。

身長184センチ。

短髪

バスケをやっている。

お気楽で年下思い。

・塚田 美穂つかだ みほ

2年生

身長168センチ

髪は後ろで束ねている。

大きい声が病気であまり出ない。

生徒副会長。

・トドロキ

本名不明。

黒髪の長髪。

黒いコートを着ている。

反乱組織、3番基地隊長。
レジスタンス

・ゲルミス ブルツクナー

ポロポロになっていた地球をまとめた男。

帝国の初代帝王。

慈悲深く信頼のある男だった。

息子に暗殺される。

・帝王

帝国の、第284代帝王。

時空を歪めて永遠の命を手に入れようとしている。

始まりの始まり

今日は朝から最悪だった。

「牡牛座の貴方！残念！！今日の運勢最悪です！！」

「鬱だ・・・」

そのさき
俺は園崎猛

学力はごく一般的な高校1年だ。

将来の夢は特にない。

楽しく生きればそれでいいと思う。

ん・・・俺は誰に説明してるんだ？

・・・まあいいや。

俺はテレビを消し、ドアを開けた

「学校めんどくせーなあ。」

そんなことを言いながら俺は、靴を履き、
家を出た。

「たけるー！！」

ん・・・この声は・・・

「ハア…ハア追いついた…」

今、目の前で息を切らしてるコイツは陣野練じんのれん

コイツは俺の新友で幼馴染だ。

そしてコイツは俺と違って頭がいい、学年2位の秀才だ。

でも運動は俺の方が出来る。これは俺の唯一の取り柄と言ってもいい。

「ところでたける…」

「なんだ？」

まだ練は息を切らしたままだ。体力ねえなあ…（笑）

しばらくして練が喋り始めた。

「染口先輩彼女できたんだって〜いいよなあそめくちせんぱい

俺も彼女ほしいぜ…」

「ああ染口先輩か…彼女の名前なんだっけ？」

「塚田先輩だよ。塚田美穂先輩つかたみほ。2年の先輩達の中でも、群を抜いた可愛さだよ…」。

いや美しいの方が正しいかな？とにかく大人っぽい人だよ。」

練が羨ましそうに話している。俺は正直彼女とかはどうでもいい。

いや、どうでもいいというのは少し違うな。正確に言うと女が怖いのだ。

そう、俺は昔から女が苦手なのだ。

女は図々しいしわがままだ。いつも自分が正しいと思っている。

「おい、たける？」

練がボーっとしてる俺を変に思い声をかけてきた。

「お前また、女が怖いとかって考えてたろ。」

「なんで分かった？」

「いつものことだからさ。」

「・・・」

俺は露骨に嫌な顔をした。

「ハハハ。そんな顔すんなよ。」

練が笑いながら言ってくる。

本当にこんな奴が学年2位の秀才なのか。

どっから見ても馬鹿丸出した。

「あ、たける。そんなこと言ってる間に学校到着だ。」

「そうだな。」

正門では多くの学生たちが吸い取られるように入っていく。

俺たちもその一人だった。

「おい！たける！」

聞きなれた声が聞こえる。

6メートルくらい向こうから身長170センチくらいの短髪の男が走ってこっちに来る。

「・・・染口先輩。」

「ん？なんだア。たける、今日はなんかテンション低いな。」

「そんなことないですよ。」

「なあ。」

練がなにかを思いついたように言った。

「今日学校サボって俺とたけると染口先輩と塚田先輩とあと一人。誰かさそつて遊びに行かない？」

「あと一人って誰だよ。」

俺は練に聞いてみた。

「んーじゃあ昇嘉ちゃんなんてどうよ？」

「・・・」

つるがまいか
敦賀昇嘉同じ1年だ。

俺とは同じ中学だった・・・。

性格は明るかった・・・様な気がする。

「お、噂をすればなんとやらだぞ」

染口先輩が、遠くを見ながら言う。

「敦賀〜！」

練が叫んだ。勇氣あるな。

「？」

敦賀が、どつちから聞こえてきた声か分からず声の主を探している。

「こっちだ〜！」

練がさらに大きな声で昇嘉を呼ぶ。

するとどつちに気がついたようだ。こっちに走ってくる。

「陣野君なにか用？」

「今日学校サボってどっか遊びに行かねえ？」

「いいよ。」

以外だった。すんなり了承するとは思わなかった。

「じゃあ今から行くか！」

染口先輩がケータイを取り出しながら言った。

“プルルル”ケータイの音が、誰もいなくなつた正門に響く。

「あ、もしもし美穂？うん。俺。ちよつと教室出て正門来て。」

3階の窓から、塚田先輩がこつちを覗きこんだ。

「おい！美穂ー！こつちだー。降りてきてくれー！」

塚田先輩は“仕方ない”というような顔をして降りてきた。

「ちよつと勇君いつたいなんなの？またなんか悪だくみ？たける

君たちまで連れて。」

そついや染口先輩下の名前勇ゆうだったな。

「でどこ行くんです？」

行く先はもう決まってるも当然だがあえて聞いてみた。

「ん〜そうだな〜。練どこがいい？」

「カラオケがいいっすー！」

言うと思った・・・練は必ずどこか行こうというときはカラオケに

行きたがる。まあ別にいいけど。

でも何だろう？今日はなぜか気分が乗らない。

何か嫌な予感がする。

そして俺は、この予感が気のせいじゃないと身を持って知ることになる。

始まりの始まり（後書き）

疲れた…とても疲れた…

書いてる途中に学校から呼び出しあってなかなか書けなかったけど
かけました…

下手ですけどコメントいただければ幸いです。

止まる時間（前書き）

いよいよ物語は始まります・・・
やっとか。

止まる時間

カラオケは思ってたより楽しい。

俺って結構歌、歌えたんだな・・・みたいなことを思っていたら

練が

「たける！行くぞ。—GO GO ゴーゴーマニャックMANIAC歌うぞ！！」
と言ってきた。・・・また、アニソンか。

といつつ俺も、ノリノリで歌った。

「うんうんいいね〜お前等若いね〜。ホント。」

染口先輩が言った。染口先輩が選曲する機械をいじっている。

「よし。もうこれしかないな。」

俺達が歌い終わると次の曲のテロップが出てきた。

ん・・・？なんだ、これは。「八代亜紀 愛の虎」・・・なんだこれは。

選曲が古い・・・。先輩はいつたい何歳なのだろうか。

「先輩・・・渋すぎます・・・。」

昇嘉がおずおずとした感じで言う。

「あははッ。まあいいじゃん？」

練が先輩をフォローする。

なんだこれは。どっかのお笑い番組的ななにかか？

まあ、実際にお笑い芸人がこんなコントしてたらその芸人は消えるだろうが・・・。

「塚田先輩は歌わないんですか？」

昇嘉が不思議そうに聞いた。

「ああ。私はいいの。病気で声あまり出せないから。」

そういえば、塚田先輩だけ校内合唱コンクール出てなかったな。そういうことか。

「でも皆が、歌ってるの見てるだけで楽しいから。」

塚田先輩が笑顔で答える。心なしか悲しく見える……。

「美穂……ごめん。」染口先輩……

「いいよ気にしてない。」練の言うことも一理ある。本当に大人っぽい人だな。顔も性格も。

「そうか……」

「うん。」

染口先輩は、まだ悪いことをしたような顔だ。

それに塚田先輩は優しく答えている。

本当にお似合いだ。

6時50分

その時“プルル”と備え付けの電話が鳴った。

「ハイ。」

練が受話器をとった。

「あと10分でお時間です。」

「わかりました。」

といって練は受話器を置いた。

「あと10分だつて。」

「よし！最後に何か皆で歌おうよ！」

塚田先輩だった。正直意外だ。

声が出ないのに、自分から……

「え……美穂お前……」

「ちょっとくらいなら声出るよ。私も歌いたいし。」

「……わかったよ。」

染口先輩が、心配そうに言う。

「じゃあそうときまれば何、歌いますか？」

練が言った。昇嘉も頷く。

「美穂、何がいい？」

「え、・・・とねえ何がいいかなあ？」

美穂先輩が機械をいじりながら言う。

「じゃあ、これで！」

画面に曲の名前が映し出された。

「AKB48 会いたかった」

あーこつち系ね。ハイ。そうか。意外だな。

でも会いたかったって・・・

塚田先輩耐えられるのか？

“ 会いたかった 会いたかった 会いたかった Yes君に”

終わった・・・正直この曲は俺にもキツイ。

テンションが高すぎる。まあいいや。

「皆、時間だぞ。」

染口先輩が、靴を履きながら言った。

「行くかア・・・」

ずっと座ってたから尻が痛い。

「うわ、もうこんな時間?!」

昇嘉がケータイを見ながら言った。

「え？今何時？」

練が昇嘉に聞いた。

「もう6時52分だよ！」

え？6時？朝の？

「あれ？違う、昼だった。」

だよな。

ん？なにかおかしいぞ。

あの受付からの電話掛かってきてからまだ2分しか経ってない？

おかしい。あきらかにおかしいぞ

歌は4分弱あったし

その後も5分くらい雑談してた。

“ガチャ” 染口先輩がドアを開けた。

「・・・なんだこれ」

染口先輩が驚いた様子で固まっている。

「うわ！」

練が叫んだ。

そして俺も外を見た。

外は辺り一面灰色に染まっていた。

時間が止まっているようだった。いや違う“止まっているのだ”

店員も動かない。時計の針も6時52分を挿したままだ。

「なによこれ・・・」

塚田先輩が出口に走って行った。

“ガチャ” ドアを開けたその先には黒い渦ができていた。

「なによ・・・これ」

塚田先輩は明らかに同様している。

そのとき“ゴウツ！！”と音を立て渦が回り始めた。

「美穂そこから離れろ！！」

染口先輩が叫んだ。

でも 遅かった。

「キヤアツ！」

塚田先輩は渦に飲み込まれてしまった。

「・・・なんだよこれ。」

染口先輩が同様ながら渦に近づいていく。

「駄目だッ！」

練が叫んだが遅かった。

染口先輩は塚田先輩を助けるために自ら渦の中に飛び込んで行った。

「嘘だろ・・・」

もうわけがわからない。

昇嘉は座り込んで泣いている。

「どうすんだよ・・・」

練が困った顔で言う。

「どうしようもねえよ・・・」

3人はその場に座り込んだ。

止まる時間（後書き）

疲れた・・・

こんなに長い文章書いたの初めてだ・・・

でも頑張った。

闇の向こう(前書き)

ようやくメインに入りました。
がんばりました。

闇の向こう

最悪だ・・・もう、何が何だか分からない。

いきなり塚田先輩が、変な黒い渦に吸い込まれそれを助けに、染口先輩まで・・・

「クソツ！なんなんだよ！！」

練が床を叩いた。

俺もなんなんだよと叫びたい。だがもう、そんな気力も残ってない。

「クソ・・・」

俺にはこう言うのがやっとだった。

昇嘉はずっと下を向いて泣いている。

皆もう限界だ。

「たける。」

練が言った。

「なんだ。」

俺も力の抜けた返事を返す。

「あの渦に入って行ったら先輩達の所に行けるんじゃないか？」

いきなり何を言うんだコイツは・・・

俺は無言で練を睨む。

「だってそれ以外に何も手はないんだぜ？」

時間も止まってるし。このままじっとしてても何にもならないだろ？

「でも・・・危ないぞ・・・。」

「此処でじっとしてても何にもならねえだろって。」

昇嘉はどう思う？」

「私は・・・此処でじっとしてるのは嫌。」

オイオイ冗談だろ？昇嘉まで・・・。

「たけるどうするんだ？」

お前が行かないなら俺達二人だけでも行く！」

・・・クソツ。

「…わかったよ。」

「それでこそたけるだ。」

・・・ツチ。いくら危険でも俺一人置いていかれるのは嫌だ。

「でもあの渦に直接飛びこむのか？」

「ああ。」

・・・全く。コイツが学年2位にはどうしても思えない。本当に。

「行くぞ。」

昇嘉が言う。コイツは結構強気なヤツだったんだな。今までもつとおとなしそうなヤツだと思ってた。

「行くぞ！！！」

練が真っ先に走り出す。

そして俺たちは、悪夢に飛び込んだ

渦の中は真っ暗でずっと闇が広がっていた。

「たける！！昇嘉！！」

練の声が聞こえた。

「手を伸ばせ！！！」

練の手が見えた。

暗闇の中に一筋の白い手。

俺はそれを掴み、闇に落ちて行った。

「ん…痛エ…」

横を見ると、鍊と昇嘉が俺の手を掴んで倒れていた。

よかった、一応、無事に渦を抜け出せた様だ。

「あゝ痛エ〜。」

鍊が起きた。

「おうたける、オハヨウ。」

「…オハヨウじゃねえよ。」

よかった。いつもの鍊だった。

「ん…あ、オハヨウ。」

昇嘉も起きた。だからオハヨウじゃねえって。

「おい…。」

ん？鍊がものすごいビックリしたような顔をしている。

「いったい此処はなんなんだ？」

俺は周りを見わたした。

「な…なんだ…此処？」

「嘘…」

辺り一面土しかなかった。

建物も木も草も何も無い。

砂漠。否、砂漠にしてはジメジメしすぎている…。

「とりあえず人探そうぜ。」

鍊が立ち上がる。

昇嘉もそれにつられて立ち上がる。

仕方ない。

「さあ、とりあえず進もう。」

2時間くらい歩いてみると小さな家のような建物が5 6戸あった。

「なんかの集落か？」

練が建物を見ながら言う。

「分からない。」

俺もわからない。

家のような建物は卵を半分に分けて、地面に突き刺したような形をしている。

こんな形の建物は見たことが無い。

「おじゃまします。」

「ッ！馬鹿！！」

練が俺の制止も聞かずに、家らしき建物の中に入って行った。

「ダメだ人っ子一人いねエ。」

俺も中に入ってみた。

埃ほこりだらけで生活感が全くない。

「ハズレだな。」

練が悔しそうに言った。

「行こう。」

昇嘉が歩きながら言った。

しばらく歩き続けると池があった。

「汚ねえ水だな。こりゃ、飲めそうもねえな。」

練、お前此処の水飲もうとしたのか。

「練、昇嘉、ちょっと休憩しようぜ。」

歩きまくって疲れたよ。」

その時だった。

「誰だ。」

背筋が凍ったように思った。

練が振り返る。

「な……！」

後ろには、ゴツイ機械の銃を持ち、ゴツイ武装をした男が立っていた。

「誰だと聞いている。その妙な格好、まさか貴様ら反乱組織レジスタンスじゃあるまいな？」

「……レジスタンス？なんじゃそりゃ？」

練……挑発しちゃダメだ。

「誰だ。早く答えろ。」

「答える義理は、ね。」

“バキッ！”

練が吹っ飛んだ。

男がゴツイ銃で練を殴ったのだ。

「もう一度聞く。お前達は誰だ。」

ヤバい。

「練！！昇嘉！！走れ！！！」

俺は男に精一杯の蹴りをかましてやった。

「……ッ。」

足は腕の3倍の筋肉があるというのが本当らしい。

男がよろけている。

「オッラア！！！」

もう一発蹴ってやった。

「行くぞ、逃げる！！！」

「……待て。」

アレ？もう走って来た。そんなに聞いてなかったか。

「急げ！！全力で逃げる！！」

「たける後ろツ！」

ヤバい。男が銃をこっちに向けた。

「死ね。」

“グチャ”

辺りの木に、赤くドロドロしたモノが飛び散った。

「・・・アレ？」

吹っ飛んだのは、俺じゃなく男の方だった。

「君達、大丈夫か？」

煙の向こうに男が立っていた。

「君達は何番基地のものだ？反乱組織レジスタンスなのだろう？」

私は、3番基地隊長、トドロキだ。」

どうやら敵ではないらしい。

「此処は危険だ。私達の基地に移ろう。」

希望が見えてきた。

闇の向こう(後書き)

疲れた

でもがんばって書いたからコメントとかくれると嬉しいです

帝国と反乱組織（前書き）

今回はほぼ説明です。

帝国と反乱組織

(本当にこの男に付いて行っているのか?)

練は考えていた。

(確かに俺達は助けられた。でも、それだけでこの男を信用してもいいのか?)

「練。どうした?」

「いや、なんでもない。」

(たけるは、あの男を怪しいとは思わないのか?)

「まだ俺の事が信用できないか?」

「え?!」

(なんだ?心が読まれたのか?)

「そうだ。まあ少し違うがな。」

「なっ…何者だ、お前…。」

「何者?うーむ。俺にとっては、お前たちの方が何者?なんだが。」

「どういうこと?」

昇嘉が不思議そうに聞いた。

「何でかって?そりゃ、軍の管轄区を武器も持たずに、しかも古代人の格好を

してたら変に思うだろ。なんでお前達はそんな格好をしている?」

「古代人?」

いきなりこいつは何を言い出すんだ？

古代人？意味がわからない。

「おい…どういう意味だ？」

練が聞いた。あの練でも混乱するんだな。

「おいおいお前達、正気か？学校で習っただろう？

古代人は今から約1000年前に核戦争で滅んだ、高度な技術を
持っていた文明だよ。

お前達、学校行つてないのか？」

「な…なにを言ってるんだ？」

訳がわからない。じゃあ俺達は…いや、そんなことは有り得
ない。

「たける…昇嘉…俺達…まさか未来に…。」

有り得ない。そんな事、絶対にあり得ない。

「否。有り得るぞ。」

コイツは心が読めるんだったな。厄介だ。

「厄介とは酷いな。」

「二人とも何を言ってるの？」

昇嘉はまだ現状を、理解できていないようだ。

まあ、その内きずくだろう。

「俺達は過去から飛ばされたのか？」

「おそらくそうだろう。悪戯いたすらではないのだろうか？」

「当たり前だろ。」

練は少し苛ついていようだまあ。無理もない。いきなり古代人
だと言われ、自分達は過去から来たと言われたのだから。

「でも何で…？」

昇嘉は苛つくというよりは、不安そうだ。

「おそらく、軍の実験の影響だろう。」

「実験？何のだ？」

俺も少し苛ついているようだ。

「今、軍は時空をねじ曲げる実験をしている。そのせいで多くの民間人が犠牲になっている。」

お前たちもさつき、通つたら？誰も居ない集落。あれは実験の影響で、そこに住んでいた、人間全員死んだんだ。」

「そんなことが・・・。」

「少し今の“帝国”の説明をしてやろう。」

「帝国？」

練が食いついた。

「2000年前核戦争で古代人：お前達の文明は滅んだ。」

そしてそれから330年後、「ゲルミス・ブルックナー」という男が

ボロボロになった世界を一つにまとめた。

ゲルミスは世界を一つの“帝国”とし、支配したんだ。

ゲルミスは非常に慈悲深く、いい王だった。

皆に信頼され、核で荒廃した世界も元に戻りはじめていたんだ。

だが、ゲルミスは暗殺された。

息子に殺されたんだ。そしてそのまま王位は息子に渡った。

それからずっと王位は、ゲルミスの息子が継いでいった。

そしてゲルミスが息子に暗殺されて以来、帝国はまた荒れていった…。

今の王は独裁政治を進めている。

もう国民の我慢も限界だった。

そして結成されたのがこの反乱組織だ。レジスタンス

今の王は時空を操って、永遠の生を手に入れようとしている。

絶対にそんなことはあり得ない、だが王はそれを信じ切っている。王一人が時空に呑まれるのならいいのだが、そうはいかないんだ。

「何？」

練はさっきからずっと男の話を聞いている。名前はトドロキだったか。

「あの村を思い出してみろ。」

王が時空を完全に歪めてしまったら、この世界、全部が呑みこまれる。

2000年前とは違う。今度は全て失うんだ。

だから反乱組織^{レジスタンス}はそれを止める。

命に変えてもな。」

「ッ……」

言葉にならなかった。コイツはこれほどの覚悟を持っていたのか。昇嘉はやっと現状を理解したようだ。驚いている。

「おっと、そんなことを言っている間に到着だ。」

ようこそ。反乱組織^{レジスタンス}に。」

俺は決めた。反乱組織^{レジスタンス}に協力すると

帝国と反乱組織（後書き）

ふう？。

次がやっと反乱組織の中に入っていきます。

多分次先輩が・・・

城下町（前書き）

今回はあまり話が進みません。

城下町

此処が：反乱組織^{レジスタンス}

いいたい、

どんな場所なのだろう。どんな人達がいるのだろう。

俺は希望を胸に反乱組織^{レジスタンス}の扉^{ドア}を開けた

。

・・・これは。。。

「なんか想像してたのと違うな。」

練の言うとうりだ。

反乱組織^{レジスタンス}の中では、たくさんの人間達が、酒を酌^くみ交^かわし飲んで
いた。

それはまるで酒場・・・。

「なんなんだ？」

俺は不満を漏らした。

此処の人間達は志があると云っていたのに。これではタダの酒飲
みの集団と同じだ。

「トドロキ、話と全く違うじゃないか。志がある者の集まり？コイ
ツ等が持つてる志は酒飲みの志か？」

精一杯の皮肉^{ひにく}を言っちゃった。

「フフフ…、面白いことを言っつな、お前は。まあ直^{じき}に分かるさ。コ
イツ等の志がな。」

俺は何も言わずトドロキを睨んだ。

トドロキは、余裕そつににやけている。

しかも、練と昇嘉は酒を飲んでる男達に混ざって、飲み食いし

ている。

“緊張感が無いのか？コイツ等は…”

俺は腹が立って、近くにあった木の椅子を蹴った。

痛い。

それを見て、今までにやけていたトドロキが高らかに笑った。

「フフ…こんなに笑ったのは久しぶりだよ…。面白い男だな、キミは。」

くそ…、こっちは何にも面白くない。

その時

“ピリリリリリリ！！！！”

何かのサイレンが鳴った。

その瞬間、さっきまで酒を飲んでた男達が立ち上がった。

そして男達は近くに置いていた武器を取り、一斉に外へ出て行った。

「お前等も来るか？」

「…ああ。」

なんなんだ、一体。

さっきまでとはまるで違う。男達は叫びながら、走っていった。

「で、どこに行くんだ？」

「うお、さっきまで飲み食いしてた練が聞いてきた。切り替え早いな。」

「城下町だ。」

「城下町？」

「ああ、城下町は帝国の城の近くの町のことだ。」

「何しに行くんだ？」

一応、聞いてみた。

「何しに行くかって？救出さ。」

「救出？」

予想とは違う答えが返ってきた。

「反乱組織レジスタンスで捕まった、ヤツが何人かいるんだ。

処刑される前に助けに行くんだ。」

・・・城下町か、先輩達いるかも知れないな・・・。

「先輩？誰だ？人探しをしてるのか？」

また心読まれた…。

「ハイ。先輩二人一緒にいたんですけど先に未来に飛ばされて…。」

昇嘉が説明した。曖昧だなと思う。

「そうか…。城下町は広いからその先輩達もいるかもな。」

「よし！！早く行こうぜ！！」

練はこういう時に熱くなる。

「ああ、早くしないとヤバいな。あのサイレンは処刑前の合図なん

だ。

あと20分くらいで公開処刑が始まる…！！」

そういうと俺達は、トドロキの後ろについて走り出した

城下町に着いた時には、既に男が野次馬に説明をしていた。

「諸君！！この男達3名は、国家に仇あだなす重罪人だ！！」

重罪人……。さつきから黙ってはいるが、レジスタンス 反乱組織のメンバーは、今にも男に襲いかかりそうだ。
トドロキも男を、凄い目で睨んでいる。

「なのでこの男達を今から処刑する！！罪名は『国家反逆罪』だ！！
皆、離れよ！！」

群衆達が処刑台から離れていく、だがレジスタンス 反乱組織のメンバーは、動かずじつとしている。

「ん？お前等、早く動かんか！！邪魔だ！！」

「……」

“スッ”

トドロキが右手を挙げた。

「お前等早く退け！！お前達もころ……」

“パンツ！パンツ！パンツ！”

「アッ…グウ…ガハッ！！」

一瞬だった。

トドロキが右手を挙げると同時に
レジスタンス 反乱組織が男を撃つたのだ。

弾は男の左腕と、腹部と、右足に当たった。

そして男は、そのまま前のめりに倒れ、処刑台から滑り落ちた。

「き…貴様等ア…タダでは…済まさんぞ…王様が…いずれ貴様らを

…。」

「もういい。黙れ。」

“パンツ”

トドロキが拳銃で男の頭を撃ちぬいた。

『キヤあああああああああ……！！！！！！！！！！』
群衆が一気に騒ぎ出した。

「う……ああ……」

昇嘉もパニックになっている。

「大丈夫だから。落ちつけ……。」

練が声を掛ける。

「おい！！お前等！！戻るぞ！！！！」

トドロキが叫んだ。

一斉に反乱組織レジスタンスのメンバーが走り出した。
俺達も走り出した。

そのとき

群衆の中に染口先輩と塚田先輩がいた。

「先輩ッ！！！」

力の限り叫んだ。

「おい！早くしろ！！捕まるぞ！！！」

トドロキに右腕を引っ張られた。

そのとき

「たけるッ！！」

先輩がこっちに気付いた。

「先輩ッ！！！」

俺は手を伸ばした。

でも届かなかった

城下町（後書き）

なんか・・・最後のほうわけわからなくなってますが
一応先輩登場ですw。

死

「先輩……」

今は最悪の気分だ。

クソッ！先輩が目の前にいたのに……。

トドロキめ……！イヤ、アイツに悪気はないんだ。

あそこですつといたら、俺達は帝国に捕まってたんだ。
仕方ないんだよ……。

「たける君、どうしたの、顔色悪いよ？」
昇嘉……。

「いや、さっきの城下町に先輩がいた……」

「え……?!」

「おい、それ本当か？」
練が来た。

「ああ、此処に戻るときに見つけたんだ。
でも間に合わなくて……。」
手に力が入った。口から血が滲む。上唇を噛んでいて、血が出てきた。

「たける……、そんなに気に病むなよ……。仕方なかったさ。」

「うん、それより早く口拭いて。」

「ああ……。」

今頃先輩達は、城下町に置いてけぼり…。

「そうだ、いいこと考えたぜ。」

「いいこと？」

「なんだよ…そのいいことって？」

「いやさ…、俺等だけで城下町行かねえ？」

「…いいよ。」

昇嘉…。

「どうする？たける。」

いい案だが危険だ…。いつ殺されるかわからない。
でも先輩を見殺しにするのか？いや、ダメだ。

「わかった。行こう。」

「それでこそたけるだぜ。」

“ 深夜2時 ”

「皆…寝たな…？」

「うん、全員寝てるよ…。」

「じゃあ練、昇嘉行こうぜ。」

「静かにな…。」

「うん。」

“キイツ”

「そつとしろよ…そつと。」

“ガチャ”

「よし、走れ！」

「うん…！」

「先輩…！」

“スツ”

「…あいつ等どこへ向かったんだ？」

「ん…トドロキ隊長どうしたんですか？」

「こんな夜中に…。」

「いや、何でもない。」

「そうですか…。おやすみなさい…。」

「ああ…。」

（あいつ等、こんな夜中にどこへ…。まさか…！）

「クソッ！」

“ガチャ”

“パタツ”

城下町は深夜なのに明るく、人がいっぱいいた。

ネオンが輝き人がいっぱい、まるで東京の様だった。

北の方はまったくいかなかったのに。

「先輩いないな……。たける、どの辺にいたんだ？」

「え……っと、あの処刑台の近くだ。」

トドロキが殺した男の血は、まだ辺りに飛び散ったままだ。
流石さすがに、もう男の死体は無かった。

『うるせえよ！邪魔だ！！』

『ああ？！ぶつ殺すぞ teme ー！！』

『上等だ コラア！！！！』

なんだ……。喧嘩か？向こうが騒がしい。

「なんだ？」

練も向こうを見ている。

「なッ……！！」

男女数人が喧嘩をしていた。

どうやら男3人が相手の彼女に手を出したのだろう。

『さっさとその女よこせや！！！！』

『誰が渡すか！！さっさとどっか消える！！』

『んだとコラア！！！テメエ舐めてっと、ホントぶっ殺すぞ！！！』

「あれ…。」

昇嘉が女を守っている方の男を指差す。

『今俺は、わけわからん状況になって腹立ってんだ！！』

やられたくなかったら、さっさとどっか行け！！』

染口先輩…。

「ということは塚田先輩も…！」

先輩達を助けに行こう！！』

練が走り出した。

『もういい！女も一緒に殺してやる！！』

男の一人が持っていたナイフを塚田先輩に向けた。

『死ねや、このアマアア！！』

「きゃあアアア！！」

“バキッ”

練の飛び蹴りが男の顔面に当たった。

男は鼻血を出して、うずくまっている。

『アニキ！！大丈夫っすか！！』

ナイフの男は男達のリーダーのようだ。

『ッ…このクソガキがアア！！』

練に向かって男がナイフを振りかざした。

「練ッ！」

染口先輩が男にタツクルした。

『ぐッ！』

男は体勢を崩し、倒れた。

頭を打った様で、泡を吹いて気絶した。

「練！染口先輩！塚田先輩！逃げよう！！」

男の頭からは少し血が滲にじんでいた。

『おい！お前等待てッ！』

「ヤバい、軍だ！」

憲兵が追ってきた。

『む…！お前！昼間の将校しょうこう殿どのを殺した、反乱組織レジスタンスといた奴だな！』

“ピイイイイイイ！！！”

憲兵が笛のような物を鳴らした。

『待てッ！』 『おとなしくしろ！』

憲兵がたくさん追ってきた。

「あの森に入れば撒まける！急げ！！」

いつのまにか憲兵は20人くらいに増えていた。

『おとなしく投降しろッ！』

やばい、もう体力が

練もそろそろ限界そうだ。

『待てッ！！』

「うるせえ！！ついてくんなッ！」

そう叫んでいる練は息が物凄く乱れている。

「やばい…、息が…。」

このままではヤバい。本当に体力が無くなる。

その時

染口先輩が立ち止まった。

「お前等先に行け！絶対追いつく！

お前達を守るのは俺の仕事だ！」

そう言うつと染口先輩は、憲兵達に向かって走り出した。

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「勇！！」

塚田先輩も走り出した。

「ダメだつて！」

練が止めた。

「今、塚田先輩が行ったら染口先輩が行った意味が無い！！

たける！昇嘉！行くぞ！

染口先輩の気持ちを無駄にするなッ！」

20人もいる憲兵を、木の棒で殴っている。

「くッ…！！」

『発砲許可はっほうきょか下りました!』

「森の中に入った時
発砲…許可…。」

塚田先輩が座り込んだ。
涙が滲んでいる。

「先輩…!」

俺は先輩を立ち上がらせた。

「急ぎましよう。」

“パンツ”

“パンツ”

“パンツ”

乾いた音が暗い森に響き渡った

死（後書き）

いつもに増して今回は書くの疲れました・・・。

喧嘩のシーンとか苦手です。

誰かコメントとかでアドバイスくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3011p/>

未来のさらに向こう

2011年1月5日17時10分発行